

人間活動における責任としての美の再生：新しいレジャー論のために

レジャー論を問うための考察の意味構造の変化
近代型の産業社会からの転換
社会・つながりの再生のための美（象徴＝共有の循環）

2013年11月10日
犬塚潤一郎
実践女子大学

今日の社会構造とレジャー

産業社会の発達と対応したレジャー論 | レジャーの意味：人間にとっての拘束活動からの自由な時間

自由時間の意味変化

家庭労働や仕事の中に、従来の意味では自由な生産活動と区別できないもの割合が増加してきている

生産・消費、生活における関係変化

“衣・食・住”の消費活動による実現
“遊・学”の産業的仕組みへの回収
知識型（情報・記号型）生産が産業の中心モデルに

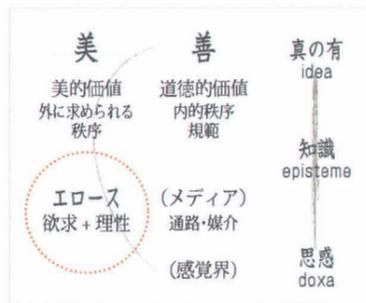
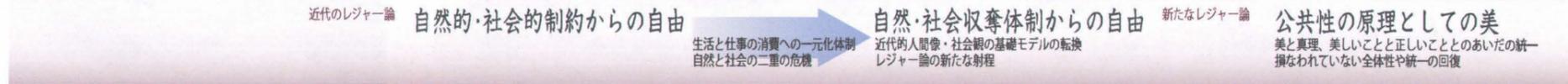
産業と結びついたレジャー

レジャー産業、消費文化

社会発展原理の見直し

近代的人間像・社会網の基礎モデルの転換
レジャー論の新たな射程

産業発展原理（グローバル市場、金融・記号型商品）が、温暖化・気候変動やエネルギー・資源枯渇など地球の物理的限界に至り、同時に、自然的・伝統的に形成されてきた人間社会の拡張限界に至る。

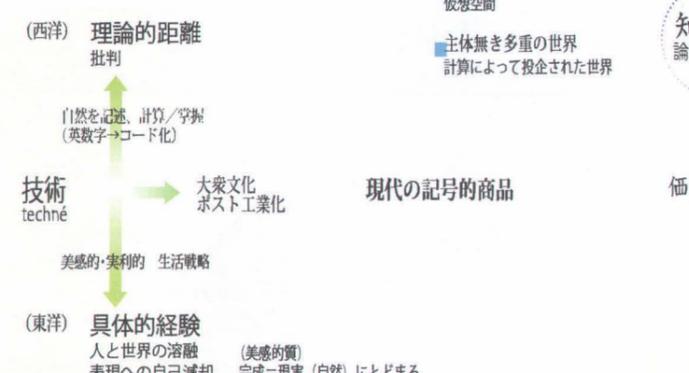
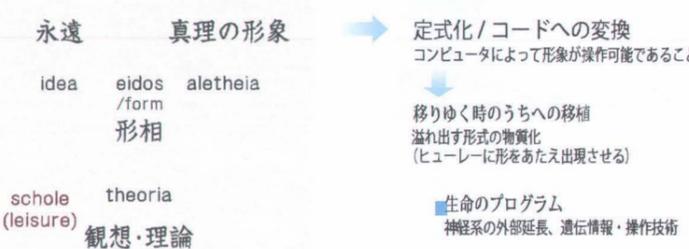


エロス論：プラトン、『饗宴』

欲望からアイデアへ：感覚界にある美しい（秩序ある）ものに向かうことから、しだいに美そのものへ向かって飛翔する。そして美を媒介として善そのものへ、個別から普遍へ、秩序・調和の原理へ。

観想的生活、アリストテレス『政治学』

theoria：労働や拘束から自由な心の状態で、知性に即して生きる。最高の価値を見つける。scholē (leisure)



精神のあらゆる領域から現実の感覚が失われる

- ・物理 → 物質・エネルギー = 数学、論理記号
- ・生物学 → 生命、発現 = 現象原理
- ・社会科学 → 社会現象 = 統計、法則の相関論
- ・芸術 → 抽象的に

制作・生産 社会組織・企業、産業

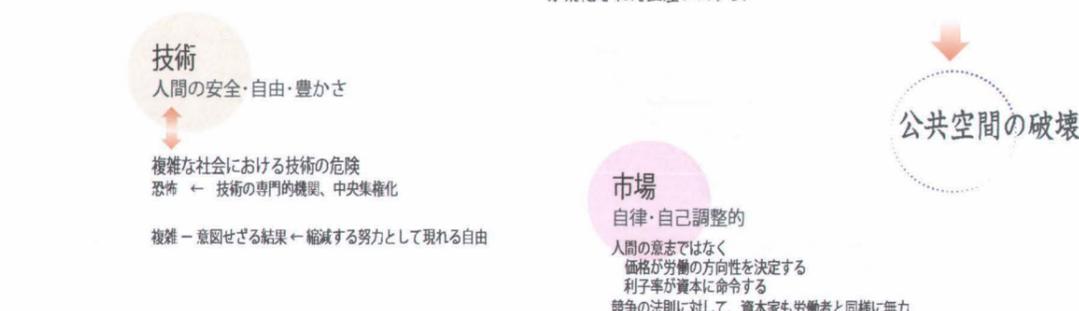
知と真の乖離 論理と倫理

価値を授ける 投企 プロジェクト

制作の場 → 新たな人間の形式

・手	身体	どこでも	自然世界
・道具	人間中心：外化	特別な場	区画と外世界 経験的情報
・機械	機械中心：材化	都市・会社	集積・集住と自然資源 三論的情報
・装置	プログラム、多平世界	x 数的・x 係的	機能する・解雇できる 三象的情報

コミュニケーション革命 → 規範の無力化
実利、モラル、政治
・価値不問の科学 全面的無責任
・分業化された生産システム



美の（社会からの）自立性

美＝事物や事象が備える固有の性質（存在論的把握）：
■ 愛すなわち認識の欲求的能力の志向的对象
人間の認識の構造から説明

模倣＝ものの起源・本質の representation：
■ ものそのものの中に起源の記憶が保持されている

大学・科学の自立：
■ 宗教から国家へ、依存の変化

芸術家の自立：
■ 宗教から宮廷へ、そして市場へ
人文主義的で学術的な理解、
芸術家自身の理性、社会的地位の要求
芸術と人間的な知の統一

■ 芸術家自身が芸術作品の起源
芸術家の記憶を保持
主観的意味付与 analog 自然と芸術の切斷

■ 作品に独創性を要求
芸術家の天才の重視

美の自立：
■ 内在から関係へ
自然を補完するものに

理性理念と美的理念の区別：
■ 概念抜きで概念する構想力 (Kant)

美と真との分化：
■ 善いことと美しいことの統一性の破壊

市場：
■ 芸術批評：判断の基準への要求
市場と専門知識 公衆と名声

美

生の質を問う感性的基準

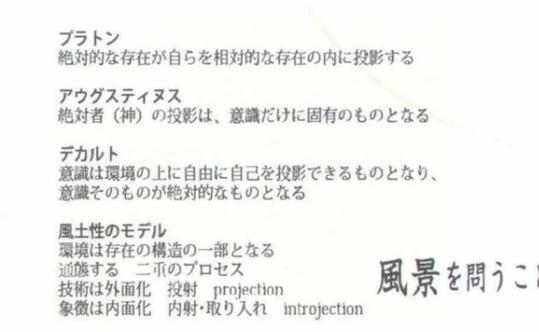
美 感性・主観的なものとして
象徴、共有・参加するものとして
秩序、真理を求めるものとして

新しい 公共性

大きな物語（価値体系）が信じられない時代・社会的個人的なものの判断・行動のスタイルとしての美
象徴性（＝共同体）の回復

自然

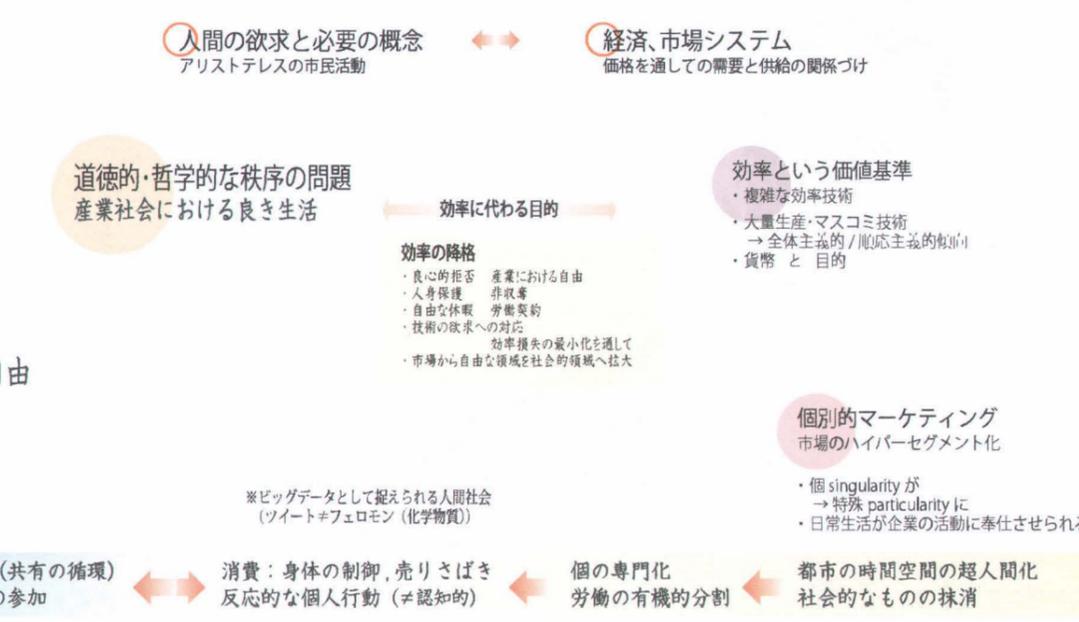
「それぞれの社会とその自然」
文化固有の「自然」
環境のうちの様々なかたち・存在の普遍的な特性を取り出す



つくる主体 芸術 | 技術

社会：生活と労働の芸術化（モリス）
■ 一人の人間の全体を投入
≠ 多くの人の部分の抽出

倫理と共同体 責任を担うことを通しての自由



象徴（共有の循環） 美への参加 ↔ 消費：身体への制御、売りさばき 反動的な個人行動（≠ 認知的） ↔ 個の専門化 労働の有機的分割 ↔ 都市の時間空間の超人間化 社会的なものの抹消